

---

# 放課後は保健室で。

彼柚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

放課後は保健室で。

### 【Nコード】

N4149C

### 【作者名】

彼柚

### 【あらすじ】

新しい保健医としてやってきた新任の色川恭子は超美人。学校の男という男に大人気な恭子に、主人公の安西和也もハマってしまう……?!

## 「プロローグ」

舞台は都立の、とある私立高校。

都会のド真ん中にあるこの高校はこの春の日、体育館で就任式を行っていた。

ようするに3月に抜けた教師達の代わりを歓迎する式だ。

知らない顔ぶれ達がステージに上がり、挨拶をしていく。

その何人かの新任教師の中で、生徒・・特に男子生徒の視線を真っ直ぐに集める教師がいた。

産休の保健医・佐藤の代わりに入った、色川恭子だ。

黒いスーツから伸びるスラツとした手足。

広い体育館の、遠くからでもわかる、アーモンド形の大きくて印象的な瞳。

たぶん長いであろう艶やかな黒髪は、きれいに後ろでまとめてあり、春らしいピンクの口紅が引かれ、ふっくらした唇は、

よく通る、高くも低くもない聞きやすい声で

「よろしくお願いします」と、一言だけ言葉を残す。

とても静かな春の日だった。

休み時間の午後。

3年J組の男子7、8人は、教室の後ろの方でジャレ合っている。

・・と、そのうちの一人が、

「なあ、もう保健室行つた？」

と、横の友達にニヤニヤしながら話かける。

相手は頬を若干ピンクに染め

「行つた行つた！やべえよ、美人だし、マツゲ超長え！」

と、同じく顔をニヤニヤさせた。

・・すると別の男子も

「だよな！あとさあ、けっこう細えのに胸デカくてさあー！！」と、話に興奮気味に加わり

「わかるわかる！やべえよなあー」

いつの間にかその場にいた男子全員が、激しく頷き合いながら顔を

とろけさせていた。

あの就任式から2週間。

3年J組だけでなく、  
校内の男子生徒の会話は、保健医の新任教師・色川恭子の話題で持ちきりになっている。

3年J組の安西和也もまた、そんな生徒のうちの一人。

ふざけながら無邪気に会話を楽しんでいた。

まさか、いち生徒の自分が、この女と深く関わることになるとも知らずに…

## 1 時限目

「でもさあ、恭子ちゃんって、けっこう性格キツいらしいぜ？」  
と、クラスの横川が口火を切る。

いつも通り、俺の3年J組では  
保健室の色川恭子についての話題が出ていて、  
うちの間では早くも『恭子ちゃん』という  
ニツクネームまでが定着しつつあった。

「それ、マジかよ！」

横川に反応して、一斉にケンジや優太が身を乗り出し、色川恭子情報に食らいつくと  
大袈裟な身振り手振りで横川が答える。

「ああ。I組の西川が仮病を使って保健室行って、ギャグで恭子ちゃんに『やらせてくれ』って言ったら『10年早い』って、スルーされたってよ。」

「お姉さまって感じだよなあ」  
ケンジが陶醉しきった顔を天井に向ける。

「そんな感じそんな感じ！」

優太も明るく応じた。

俺も適当に相槌を打っておく。

……俺 こと、安西和也は、周りのみんなほど、話題の『恭子ちゃん』に特に感心は無かった。

こんな風にみんなとバカな話をするのが、ただ楽しかったただけだ。

だけど、みんなが色川恭子のことを美人だキレイだ……って騒ぐから、少しくらいの興味はあった。

そう。

たったそれだけ。

たったそれだけだったんだ

.

この日の6限目は体育で、サッカー。

グラウンドへ通じる下駄箱で  
靴を上履きから運動靴に履き替えていると、  
キツキツと数人の明るい女の子の声がした。

「和也せんぱあゝい！」

そこから聞こえた声に顔を上げると、移動教室なのか  
教科書を抱えた下級生っぽい女の子が何人かいて、その中の肩まで  
伸ばしたストレートの茶髪の子がこっちに向かってニコニコしながら  
手を振っている。

愛想笑いを作ろうとしたけど、ハハッと、ただの苦笑いが出た。

「どーも。」

首だけで軽く頭を下げる。

「きゃーかつこいいー！！！」

「ユミ大胆ー！」

きゃあきゃあ騒ぎながら楽しそうにバタバタと廊下を駆けて消えて  
いった。

3秒間の沈黙の後。

「おい和也、なんだあれ」

「お前も隅に置けねえなあゝ！」



そばにいた横川たちが、こぞって俺の脇腹を肘でグリグリする。

「あんな子知らねえけどな」

「またまたあゝ！」

グリグリが、一層強くなった。笑

「ってゆーか、どけよ」

騒いでいると、後ろから冷たい声がした。

下駄箱で騒いでいた俺らが邪魔だったのか、俺より背が少し高い、グレーのカラコンをした男が、その目でギロリとこちらを睨む。

ドカツ

間を抜けていくそいつの右肩が俺の左肩にぶつかった。

その時

呟くような低い音で男が囁く。

「女に騒がれるぐらいでいい気になってんじゃねえよ」

「はあ？」

なんでいきなり、んなこと言われなくちゃなんねえんだよ。

そのままそいつは、それっきり振り返らずグラウンドへ出て行った。

「なんだあいつ！」

ケンジが舌打ちする。

「あれだべ、I組の留年生だよ。日高圭介だっけ？」

「ああ、いたなあそんなの」

優太と横川は、その日高って奴を知ってる風だ。

ピリリリリ

外から体育顧問のホイッスルの高い音が聞こえる。  
集合だ。

「とりあえず俺らも行くか」

気を取り直してグラウンドへ走り出した。

俺もケンジも横川も優太も、実はみんなサッカー部だから脚には多

少の自信があつた。

今日はたまたま合同体育で、お隣のI組と試合。  
こちらJ組が2点のリード。

俺は相手チームの日高圭介と、白線のフィールドの真ん中でボールの奪い合いをしていた。

さっきのこともあり、

“ 負けたくねえ！ ”

強くそう思った瞬間、うまい具合にボールが俺の方に転がり、すかさず少し離れた所にいたケンジにパスを回した。なぜか右足首に、ズキッ！と軽い痛みが走る。

あの目が、なぜかまた俺をギラリと睨みつけた。

回したパスを、相手チームに妨害されながらもなんとかケンジがキレイな曲線を描いてシュートをキメたと同時に、6 限終了のチャイムがフィールドに鳴り響く。

「 よっしゃあ！ 」

横川がガッツポーズをとる。

「ケンジ、グッジョブ！笑」

「任せろって」

クラスメイトに、ケンジがピースサインで応じた。

「…ッ！」

3 - 0 の勝利を喜び合うクラスメイトに混ざりながら、さっきの右足がまた痛んだ。

「和也！」

優太が俺の様子に気が付く。

くるぶし辺りのジャージの生地がジワジワと赤く染まり出していた。

優太が怒りのこもった眼差しで俺の足首を見つめている。

「やられたな」

「だな。」

さっきのボールの取り合いの時、スパイクで日高に蹴られていたよ

うだ。

幸い、血は出てるけどそんなにひどいケガじゃあない。

顔を上げると、遠くで日高がこちらを見ていた。

普通こんだけ当たったなら、蹴った方は気づくよな？

気付くんだったら謝るよな？

たぶん今度は俺が日高を睨みつけていたんだろう。

視線を日高から動かさない俺に、優太が宥めるように言った。

「和也、あいつ　イイ噂聞かねえよ。今行っても多分、逆ギレされる…」

「わかってる。普通じゃねえな…。」

日高が遠すぎて、表情まではわからなかったが、きっとあの目で睨んでいるような気がした。

「とりあえず保健室行ってくれば？俺、先生に言っとくから」

「おっけ。頼むわ」

俺は優太に促されるがままに立ち上がって1人、グラウンドを後にした。

「失礼しまーす」

久しぶりに入った保健室は、いつでも何か独特の匂いがある。

辺りを見回すと、なんと誰もいない。

デスクが1つとカーテンの奥にベッドが3つ。あとは白い棚が並ぶだけ。

「先生？」

……… 応答なし。

「いねーの？」

帰ろうとして、最後にもう一度辺りを見回した。

ヒュウウウウ...

半開きになった南向きの窓から、気持ちのいい春風が吹き込む。  
と、ベッドを隠すカーテンが大きく揺れた。

「えっ...?」

俺の心臓を、激しい動悸が襲う。

なぜって、

一番奥のベッドのカーテンの隙間から、仰向けに横たわった女の脚が見えたから。

## 2時限目

鼓動が早いまま、ドクンドクンと胸の中で心臓が暴れる。

さっき一瞬だけ見えた脚はとても長く、ほとんど脚の付け根まで露わになっていて、それはストッキングに包まれていた。

「せ　先生？」

風が止んで再びキレイに閉じた一番奥のベッドのカーテンを、少し迷いながら右手でゆっくり開ける。

.....！

カーテンの先のベッドの上には、白衣を着たまま色川恭子が倒れていた。



「ちよっ……！」

心配と不安と焦りとが、一気に俺の中を侵略する。

頭が真っ白になり、とりあえず色川恭子に近づいてみた。

「すーすー…」

「…ん？」

落ち着いてよく見ると、胸が規則的に上下している。

つか寝息が聞こえている。

……って、寝てんのかよ！笑

心の中で色川恭子に突っ込みを入れつつも、俺はなんとなくその場を離れられないでいた。

そのまま、寝顔に目を落とす。

漆黒の長いまつげ。

スツと通った、高い鼻。

やや色白な、きめの細かい肌に  
バラ色の頬。

ふわふわのロングヘアー。

柔らかそうな唇は、ベビーピンクのグロスで上品に彩られている。

就任式の際に体育館で始めて見た凜とした印象とは違つ、無邪気な  
顔で眠っていた。

横川とか、クラスの いや、  
学校全体の男が騒ぐだけあって、やっぱり色川恭子は美人だ。クラ  
スの女とかじゃ比べてものにならない。

…でも勝手に寝顔なんか見てたら失礼だよな。

「ごめんな、先生」

色川から背を向けて、カーテンに手を掛ける。

「……行かないで」

甘い声が背中に届いた。

「…え？」

振り向いて、もう一度色川恭子に目をやる。

もしかして誘ってるのか？

……なんて、一瞬のやましい期待は見事に大きくカーブした。

「行っちゃ…やあ」

先生は、うなされながらそう呟く。

その閉じられた瞳からは、涙が流れ出した。

「寝言 か」

ホツとしたような残念なような複雑な気持ちのすぐあと、ハツと我に帰る。

どんな夢見てんのかな

寝ながら泣く人なんか初めて見た。

「せんせ、起きてよ！」

何か助けてやりたかったけど、結局俺は、先生を起こしてやることくらいしか思いつかなかったんだ。

「なあ、先生っ」

細い両肩を掴んで、軽く揺さぶる。

「ヤダあ 行かないでえ」

「わかったわかった、絶対行かないから」

適当にハイハイと返事をした。

「……ん、よかったあ」

小さな子供みたいで、満面の笑み。

寝ぼけながら細い腕を俺の背中に絡めて、誰と間違えているのか、そのままぎゅっとしがみついていた。

「おい、ちょっと！」

慌てて先生の背中を片手で支える。密着する細い体。だけど押し付けられた胸は豊かで、顎には柔らかい髪の毛が当たる。

フワッとANNA SUIみたいな甘い香りに包まれ、暖かい体温が伝わってきた。

心臓が、どうにかなっちまいそうな程にうるさく脈打つ。

……こんな美人な大人の女でも、こうゆう甘え方ってするんだろうか。

反則だろ かわいすぎ。

うまく言えないけど、  
時間がこのまま止まっちまえばいいなんて思った。  
同時に、

いつもこうやって、この人に愛されて、この人を抱ける男が心底羨ましくて、すごく妬けた。

「で？あんたは何してたの？」

目の前の白衣の女が、冷ややかな視線をこちらに向ける。

「だから何もしてねーよ！」

右足のジャージの裾を捲り上げながら、俺は抗議の声を上げた。

「白状なさい！」

そいつの持つてるピンセットの丸い綿が、消毒液を纏って俺の傷口を容赦なく攻撃する。

「ッ痛え！」

「あんだ男でしょ?!」

……これがさっき甘えてきたかわいい女と同一人物だなんて、俺には到底信じがたい。

簡単に説明すると、こうだ。

あのベッドで俺が動けないままの状態からしばらくすると、

「……ン」

色川恭子がやっと目を覚ました。

「……………」  
「……………」

抱き合ったまま目が合って、俺が何か言おうとしたらそのまま

「きゃあ!何なのよあんだ!!!」

という言葉と張り手が飛んできた。

…とまあ、こんな感じだ。

要するに、変な誤解をされたいらしい。

「まったくもう！油断も隙も無いじゃない！」

色川がピンセットの綿をゴミ箱にポイッと投げ捨てる。

「だから違っちゃって！」

目の前の白衣の美女はガーゼと包帯を白い棚から取り出しながら、まだプリプリと怒っているようだ。

俺も負けじと言い返す。

「手当てしてほしくて入ったら寝てたから起こそうとただけだつて！」



「ふうん、抱きついて起こすんだ？」  
「うっ」

……まあ、誰だってそりゃあ目が覚めて知らない奴と抱き合ってた  
ら、驚くさ。

襲われたって思うさ。

だけど待つてほしい。

俺は抱きつかれたんだぞ。

抱きついてなんてない。  
ただ体を支えてただけだ。

……そりゃあ、勝手にカーテンに入っただけは悪かったけど

どうせ、抱きついてきたのはあんただって言ったって信じてもら  
えねえよな？

「うつせーな、ハイハイしませんでしたーあ。笑」

思いつきり開き直ってやったら、初めて色川がちゃんと笑った。

「うわ、何このガキ！笑

まあ、あたしも勤務中に寝てたことだし、お互い様かなっ？」

笑うとちよつと人懐っこい顔になるらしい。

「このケガどうしたの？」

色川が、包帯をくるくる足に巻いてくれながら聞いてきた。

「サッカー。」

「へえ。サッカーって格闘技だったんだ？」

「え？」

何か知ってるような口ぶりに、びっくりして色川の目を見た。

アーモンドの瞳が、親が子を窘めるように俺を見つめ返す。

「ほどほどにしなさいね。」

あんたみたいなタイプは、けっこう逆恨みされやすいでしょうから。これはボールが当たったとか転んだとかの傷じゃないもの。」

「。。」

この人には一体、何が見えてるんだろう？

包帯が、パチンとハサミで切られ、留め具をされる。

「ハイ、おわり！」

あなた、名前は？」

「安西和也」

ジャージの捲れを直して立ち上がる。  
遅れて、色川も立ち上がった。

意外と、こう見ると背が高くない。  
俺と頭1つくらい違うかも。

「そ。安西くん、暇があつたらまたおいで。  
ただし覗きはしないでね」

「バーカ！笑」

この時俺は、忘れていた。

色川が誰かを想つて、泣いていたことを。

### 3 時限目

いつだってここには、独特の暖かさがある。

そう感じるようになったのは  
いつ頃からだったかな。

今日もいい天気だ。

5月病なのか この暖かさが  
余計に、眠気の心地よさに拍車を掛ける。

「      とかなんとか言いながら要するに、ただ、寝に来たんでしょ？」

あの女が、冷たいようで暖かく笑いながらツッコミを入れた。

すかさず俺は、茶革張りの長椅子に、つられて笑いながら寝そべる。

「バレた？」

「あら、当然。」

得意気に、しれつとして書類に目を戻し、白いコーヒークップに唇を付ける色川。

陽のよく当たるこの場所は、やっぱり噂の保健室。

あれから俺は、暇さえあればよくここへ通っていた。

色川の長い髪が、白いカーテンをぐり抜けた窓からの風でサラリと優しく揺れる。

その姿は、どこかモデルか女優のように見えた。

全く。

何をやってたって・何もしなかったって、なぜか色川はキレイに見えちまうから、なんとなくズルい。

「ん？」

視線に気づき、顔を上げる色川。

「別に」。

ファンデーション厚いなあと思っただけ。」

「安西くんになんか判るとは思えないけど？」

強がりとも取れるクールな返しに、俺は肘を立てて掌を枕にしながらケタケタと笑った。

見とれてたなんて誰が言えるか。

「ほら、そんなところで寝ると風邪引くわよ。寝るならベッド使いなさい」

「はい」

怒るでもなく、微笑みさえ浮かべる大人な色川に、俺は黙って従った。

色川に背を向けて、あの時の一番奥のベッドのカーテンを引きながら考える。

なんだかんだ言っつて、色川はいつも優しいんだ。

「きて  
」

遠くから女の声が聞こえる。

あと、チャイムの音。

声の主が、柔らかい手でそつと優しく俺の髪をかきあげた。

「起きて  
」

「んう  
」

俺は、ぼんやりする頭で考える。

ああ、そうか 寝過ぎた俺を恭子ちゃんが起こしてくれてるのか



…ん？ 待てよ…？

この間の恭子ちゃんみた

もしかしたら俺は、このノリで恭子ちゃんに抱きつけるんじゃないか…？

そっだ、きつとそっだ！

眠い時って何考えてるのか自分でもよくわかんねえモンだよな。

「ん きょうこちゃ」

俺は髪をかきあげる恭子ちゃんの手を右手でグイッと引き寄せる。

「きやつ」

そのまま細い腰を抱き寄せ、恭子ちゃんの胸に顔を埋めた。

恭子ちゃんの香りがする。

…？

いや、違う。

これは確かマリアナ。

恭子ちゃんはANNA SUI。

不信に思った俺は、やっと顔を上げた。

「恭子ちゃん？」

「…っはあ?!」

見上げた先には恭子ちゃん

ではなく。

「せ 先輩って大胆っ」

茶髪に肩までのストレート。  
パツチリした丸い目。

…どっかで いや、誰だっけ?こんな子知らねえ…

とにかく俺は彼女から手を、素早く身体ごとひっぺがした。

「いや！ごめんな！？違うんだ！！」

もう眠気なんてとつくに消え失せた。

「いいんです、あたし 和也先輩となら……」

何やら頬を赤らめて首を横にぶんぶん振る彼女。

弁解を重ねる俺。

「うん、だからそれはね」

「2人の新居は世田谷の真っ白一軒家で……」

この子俺の話、聞いてねーし！！

っーか2人の展開早ーだろ！！

もう目とか、どっかイツちゃってるし！！

「……で、1年後にはかわいい女の子の赤ちゃんが……」

「……参ったな」

何やら変な妄想が止まらない彼女を横目に見ながら、俺はベッドに腰掛けて溜め息を吐いた。

## 4時限目

「老後は2人でロンドンに住んで」

しばらく待っても妄想が終わらないようなので、俺はとりあえず聞いてみた。

「だいたいおまえ誰？なんで名前知ってんの？」

彼女は妄想を中断し、わしっと俺の右手を両手で握って熱い眼差しを向けた。

「ごあいさつが遅れました！

金井ユミって言います！

先月、先輩と廊下ですれ違った時に一目惚れしちゃって、勝手にお名前調べさせていただきました！」

「えっ」

頬が引きつったのが自分でもわかった。

そう言われてみればこの子、よく見ると、前に下駄箱でキヤーキヤー

「言ってきた子だ。」

「あ、そう。じゃあその金井は、なんでここにいんの？先生は？」

とりあえず握られた右手を解き離す。

金井は、あからさまに残念そうな顔をした。

「ユミって呼んでください！  
ええと あたしが昼休み終わる頃に目薬を借りに来たら、色川先生が

『もうすぐ5限目が始まっちゃうから、奥で寝てる男の子を起こしておいてくれないかしら。』

あたしは職員室に用があるから よろしくね』

って。したら和也先輩がベッドにいて！これってやっぱり運命ですよねっ！！」

「あの女あゝ！」

再び金井の妄想スイッチが入っていたが、敢えてそこはスルー。

「授業も行かずに、一体誰のことを言ってるの？」

開かれたままの区切りカーテンから おそらく職員室から帰ってきたばかりの、色川恭子の姿が覗いていた。

あの得意気な笑みを、サーモンピンクの唇が妖しく彩る。

「あんた達、チャームが聞こえなかったの？それとも、2人仲良くサボり？」

「ばか、ちげーよ！」

茶々を入れる色川に、遠慮なく容疑を否認する。

俺の後ろにいた金井がペコリとお辞儀をして見せ…

「先生すみませんでしたっ！」

そして驚くべき言葉を告げた。

「じゃあ先輩、胸ポケットにアドレス入れといたんで、メール下さいね

お先に失礼しまぁーす！」

「はあ？」

さっぱり意味がわからなかった俺にウイंकを残し、  
金井はスキップのような軽快な足取りで保健室を去って行く。

慌てて、白いYシャツの胸ポケットを右手の指で広げると、  
案の定、  
キレイに四角く折り畳まれた白い紙が入っていた。

当然、中身には金井のものらしきアドレスと  
ご丁寧にケータイの番号までがピンク色のペンで書かれていた。

「おい、金井！こんなの」金井を呼ぶも、もちろん既にここから  
消えている。

あいつ、いつの間に。

「なあに？ラブレタあ？」

色川が、呆然とする俺の左隣へ回り、すぐ脇からその小さな紙を樂  
しそくに覗き込んだ。

色川のANNA SUIが香る。

近っ…

それも、息が掛かつちまうんじゃないかってくらい。



「ラブレターじゃねーよ。

つか、なんで先生が起こしてくんなかったの？」

「あたしじゃなきゃ嫌だった？」

すぐ脇から俺を見上げる色川。すると、必然的にその、俺を見つめた目が、上目遣いになるわけで。

くそ、むかつく…かわいい。

だけど、そんなこと悟られちゃいけないから

「ばか、んなわけねーだろ！笑

いや、だってなんか、あの子変なんだもん！」

とか、強がってみる。

色川は、気づいているのか・いないのか、ふわっと髪をなびかせながら俺から離れ、デスクに着いた。

再びANNA SUIの香りが舞い、遠ざかる。

「でもね、金井さん あの子ね、ずっと安西くんのこと好きみたいよ?」

「は? いきなり何それ。」

小さな紙を、斜め前の青いゴミ箱に投げ捨てようとすると、色川が黙って、デスクから右手を前に出してそれを制し、話を続けた。

「あの子もあなたみたいによくここへ来るんだけどね 何で  
だと思う?」

「?」

想像も付かず、そのまま首を傾げた。

「…あなたの相談よ。『かつこよくて、笑顔がすつごく素敵なの』  
ってね。」

「なんだかわいじゃない?」

そう言つて、色川はふふつと笑つて見せた。  
俺は、ふうん と、適当に返事を返す。

仕方なく俺は、右手に握ったままだった紙を、黙ってポケットに戻した。

## 5 時限目

眠たかった5月が終わり、  
6月が、早くも終わりに近づきつつあった。

連日、シトシトと長く嫌な湿気と雨が続いて東京を包み込む。

雨なんか嫌いだ。

きつと今日の3限の体育も、  
大好きなサッカーじゃなくて卓球とかになっちまうんだ。

そんなことを、下駄箱でローファーを脱ぎながらぼけっと考えて  
いると、背後から例の明るい声がした。

「和也せんぱあゝい！」

振り向かなくなつて、それが誰だかよくわかる。  
しかし、一応振り返る。

「はよっ。」

笑顔の金井が、まるで犬みたいに嬉しそうに、小走りで駆け寄ってきた。

そして甘えたような声をだす。

「せんぱあい、一体いつ、ユミにメールくれるんですかあ？」

ぎくつ。

「？先輩いま、ギクツてしませんでしたあ？」

疑いの眼差しを向ける金井。

「ばか、そのうちな！」

ごまかすように金井の頭をポンと叩き、そのまま足早に教室へ向かった。

後ろから、絶対ですよぉ

なんて、呑気な声がある。

きつと背中 of 俺に手を振っているに違いなかった。

「和也、そりゃあ贅沢ってもんだろ」

いちごミルクのストローを口にくわえながら、ケンジが俺の肩を抱いた。

「俺もそう思うね！」

前の席に逆座りした優太も、首をコクコクと上下させる。

授業の間の休み時間を利用して、俺は金井のことを、いつものメンツに相談していた。

「ってゆうか、あの子フツーにかわいくね？」

横川までもが、金井にGOサインを出し、曖昧に返事をする俺。そう。

横川の言う通り、確かに金井はかわいい顔をしている。

犬顔っつーか

目え大きいし、よく笑うし。

髪も茶髪のわりにサラサラ。

でも何かが違う。

かわいいんだけど、妹的な。

考え込む俺に、横川が言葉を続けた。

「でも和也は、恭子ちゃんが好きなんだもんな」

「ばっ  
」

顔が、耳が、一瞬で熱くなるのを感じる。

「マジで!?!」

「なんだ!そーだったの!?!」

ケンジと優太も、目を見開いて食いついた。

「ばか、んなわけねーだろ!」

バチッ!!

「　　っ　　ッ！」

横川の額に、右手で強めのデコピンをかます。

デコをさする横川を尻目に、

俺は他の2人に向かってなるべく平静を保ちながら言った。

「だいたい、何歳年上なんだよ、5つだぞ5つ！」

「そりゃそうだよなあ」

優太が頷く。

ケンジの方と言うと、何か怒ったような顔をした。

「好きになっちゃえば歳とか関係なくね？」

そういえばケンジは、大学生の彼女がいるんだっけ。

「わり、そりゃーそうなんだけどさ」

「だろ？」



俺の肩を抱いたまま、ケンジが眉を上げて意味深に笑ってみせた。

窓の外に目をやると、やっぱり雨が降っている。

次の授業はきつと、サッカーじゃなくて卓球だ。

俺は、誰にも気づかれないような小さな溜め息を、フツと短く吐いた。

3限の体育では、いつかのグレーのカラコンの日高に再びガン飛ばされ、

4限の数学はフツーにテキストにこなし、

昼休みは焼きそばパンとチキンサンドかじって、

5限の古典はボケつと過ごし、

6限の英語なんか、更にボケつと過ごした。

何もかもいつもと同じなハズなのに、今日、色川の話をした時から、ケンジのあの意味あり気な笑みや、色川の顔が頭から離れなかった。

そしてホームルームが終わり、横川たちのお好み焼き屋への誘いを断って、ひとり廊下を歩く。

どこへ行くつもりでもなかったと思う。

なのに、フツと顔を上げると、俺は保健室の前にいた。

いつもいつも来てるから、足が馴れちゃったらしい。

今日は来る気なんて無かったんだけどな。

それでも、目の前の扉を開けようかどうか迷って立ち止まっていると、

「和也くん？」

と、声がした。

驚いて、声のした方に振り向く。  
もちろん誰だかわかった。

だけど、朝、金井に呼ばれた時とはかなり違う気持ちで振り向いていたんだと思う。

振り向いた先には、いつもと変わらない色川恭子が佇んでいた。

ただ、いつもと違うのは

色川が、いつもの真っ白な白衣ではなく

それとは反比例した、まるで闇夜のように黒い喪服を身に纏っている、ということだ。

しかし、俺が何か言うより早く色川が、喪服と同じ黒のバッグから保健室のキーを出して、

それを鍵穴に差し込みながら、いつもの顔で、声で、言葉を紡いだ。

「ふふっ、もう放課後なのに。

暇ならコーヒーでも飲んでいかない？」

外から雨の音が聞こえる。

俺は黙って頷いていた。

## 6 時限目

「雨ばかりでヤダねえ」

雨の音に交じって、

ポットから、白い蒸気と共にコポコポと音が聞こえる。

でもそれ以外は何も聞こえなくて、すごく静か。

色川は喪服の上着を脱ぎ、それをデスクに寄せた椅子の背もたれに掛けた。

色川が着ていた喪服はワンピースタイプのもので、ノースリーブから、二本の華奢な細い腕が露わになる。

その光景に、胸がイタズラに高鳴るのを感じた。

「ねえ和也くん、お砂糖とミルクは？」

長椅子に腰掛けた俺に、色川がポット片手に問いかける。

「 いない。」

「 ！ ふふ、そっか」

鼻歌を唄いながらコーヒーを淹れる色川を盗み見ると、少し楽しそうに笑っていた。  
ブラックがそんなにおかしいか。

「 はい、どうぞ 」

「 ありがとう 」

笑った色川から差し出された白い紙コップを受け取ると、そのまま俺の長椅子の左隣に座った。コーヒーの香りが優しく鼻をくすぐる。

砂糖が入っているらしい。

一口飲むと、少しだけ甘かった。

すげえ、うまいけど

なんだか子供扱いされているようで嫌だ。

どこか宙を見つめながらコーヒーを飲む色川を、もう一度だけ横目で盗み見した。

それにしても

なんで喪服なんて着てるんだろう？

視線に気が付いたのか、色川が、こちらを向かずに、またフフッと笑った。

「どうしてこんな服着てるんだろう　って考えてるんでしょ？」

「！」

どうして喪服なのかも気になるけど、俺はこの人の勘の良さのほう  
がよっぽど気になる。

「。。」

何も言わない俺の代わりに、  
コーヒーの無くなった2つの紙カップを重ねて、色川が呟く。

「人の　命日だったの。」

「…うん」

それは少しだけ淋しそうな声。  
バカな俺は、返事しか出来なかった。

だけど、これだけはわかった。  
色川の細い肩が震えてる。  
でも絶対、寒いんじゃない。

いつのまにか色川はうつむき、その頭を俺の胸にくっつけるように  
して、もたれ掛かった。

「先生」

「ごめ」

…そこから後は、言葉にならなかった。

色川恭子は、まるで小さな女の子みたいに泣きじゃくる。

タオル生地の青いハンカチを渡した。



そして、少し迷ったけど、

色素の薄い、まるで絹みたいにキレイな長い髪に左手で触れて、壊れ物を扱うみたいに優しく撫でた。

胸がズキズキ痛む。

きつと色川はもつと痛いんだ。

開け放した窓から、

季節に似つかわしくないような、雨に冷やされた風が吹き込む。

降っては止めどなく地を濡らす雨は、俺の胸にいる今の色川になんとなく似ているような気がした。

俺には雨なんて止められないし、色川の髪を撫でてやることくらいしか思いつかない。

雨なんか大っ嫌いだ

「先生 いっぱい泣いていいよ…俺何も出来ないけど、そばにいるから。」

だいぶ落ち着いた様子の色川が、胸の中で嗚咽を上げながらコクン

と頷く。

そして、ゆっくりとその顔を上げた。

「 ありがとう 」

潤んだ目で見上げた顔は、いつもの強い大人の女性なんかじゃなかった。

それはとても弱くて脆い、普通の女の子の顔だ。

この人を守ってやりたい。  
だけど、抱き締めてメチャクチャに壊してやりたい衝動と激しく交差する。

「 頼むよ、そんな顔しないで 」

顔を鼻先まで近づけ、涙に濡れそぼった頬を右手で不器用に拭った。

赤い唇がすぐそこにある。

あと少し近づけば、それを唇で触れられるくらい近い。

我慢出来そうになくて、壊しそうなくらいギュッと強く抱き締めた。

こんなに近いのに、  
キス出来ない。

死ぬほどしたいけど、  
嫌われる方がよっぽど辛い。

どうしよう

俺 色川が好きだ。

## 7 時限目

それから1週間が過ぎた。

いつも通り

金井に追い回されたり

横川たちと笑ったり、  
そんな毎日。

ただ、保健室には  
1度も近づいていなかった。

気が付いてしまった  
自分の気持ち。

色川の泣き顔が浮かぶ。  
頼りない眼差し。

否定できない想い  
同時に  
叶うことのない気持ち

そうだよ

色川に俺の気持ちなんか  
仮に伝えたとしても  
迷惑に決まってる。

だって5つも違うんだから。

困らせるだけなら  
蓋でもしちまえばいい。

こんな気持ち  
いらないだろ  
？

だから  
あそこへは行けない。

俺はきつと

この気持ちを

色川に 隠せない

ため息が力なく出て

重い肩を椅子に任せた。

「和也、いいだろう？」

「？ なにか？」

誰かに話を急に振られ  
顔を上げる。

周りには何か他の話題で  
盛り上がったみたいだけど

一切聞いちゃいなかった。

優太が笑顔で答える。

「今日の合コンだつてさ！  
相手は聖蘭女」

「行かねー」

「早っ！！！！！」

優太の言葉が  
終わらないうちに即答。

嘆く優太を尻目に

俺は椅子から立ち上がって  
3年J組を後にした。

3階から上は屋上になっている。

生徒が普段使わないから  
上がる階段には埃が目立った。

階段を登りきり  
一枚の、錆びて  
重たいドアを開けると、  
俺の前に、柵で覆われた  
無機質なコンクリートの  
広い空間が現れた。

続いていた梅雨は  
既に終わっていて  
見上げた空はいつになく青く  
白い雲が穏やかに浮かぶ。

日増しに大きくなっていく  
雲を見ながら

次の季節がやってくる予感を  
確かに感じていた。

鉄柵に背中をもたれて座り、  
大きなため息を吐き出す。

その時。



「かずくん、サボりい？」

「……っ」

「いい天気だなあオイ！」

眩しそうに空に手をかざし、  
ゆっくり近付いて、そいつはそのまま俺の隣に腰掛けた。

「…ケンジ」

「サボるなら俺も付き合おうと 思って〜」

「」

「俺、思っただけどさ」

ケンジがおもむろに  
口を開いた。

「おまえ、最近変だよ」

「え」

何の心の準備もしていなかった俺は、素直に固まって  
しまったんじゃないかと思う。

ケンジは空を見上げたままだった目を、真っ直ぐ俺へ向けて続けた。

「恭子ちゃんのこと、好きなんだよな？」

「っ！」

心臓を貫いたケンジの台詞に急いで弁解の言葉を探したが  
ケンジがそれを手で制した。

「いいよ、わかるから。」

「でっ」

「どーせ、自信無いから諦めようとか思ってたろー？」

「っ」

黙るしかなくて  
俺は俯いてゆっくり頷いた。

「やってみなきゃわかんねーよ。出来ることは全部 やってみなきゃさ！」

「ケン」

「がんばれよ」

ケンジは男の肩をバシン！と叩いて立ち上がった。  
後ろ姿が遠ざかる。

「サンキュ！」

背中に声を届けると、

ピースにした左手をゆらゆらさせて見せて、ケンジは出口へと消えていった。

空が

気持ちのいい程に青かった

## 8 時 限 目

### K y o k o   S i d e

この窓からは、グラウンドがとてもよく眺められる。

遠く、その地面はユラユラと揺れて塵気楼を起こしていた。

気が付けば

辺りは午前中に比べ

ゆっくりと蒸し暑くなってきた。

私がここへ来た時は桜の花びらが、まるで雨みたく降り注いでそこから中を一面、ピンク色に染めていたのに。

-

ガラッ

グラウンドを眺めながら、  
ほんの3カ月前の桜を思い出していると、

開いたドアから、左手に小さめの白いビニール袋を提げた、  
1人のスラッとした男の子が現れて、  
はにかみながら首だけを下げて、私に挨拶してみせた。

「こんにちはっス」

安西和也。  
久しぶりに見る顔だった。

「久しぶりじゃない！  
今日はどうしたの？」

彼に、机を挟んだ自分の向かいの席を勧める。

「久しぶりだっけ？別に何も！  
てか、暑くね？」

そういえば、

彼のトレードマークだった前ボタンのグレーのセーターは、腕捲りされた真っ白な長袖のYシャツに変わっている。

「え まあ。」

「でしょ・・？だからコレ！」

彼がビニール袋から何やらゴソゴソと2つ、机の上に取り出した。

「あ！」

思わず声を上げる。

冷たそうなバニラのカップアイスと、赤くて三角の棒アイスだ。

「一緒に食おう？」

カップの方のアイスを手渡してくれながら、彼が少しだけ、ねだるような甘えたような顔をする。

放課後とは言え、

一応、勤務中なんだけど。

だけど、その顔を見るとなんとなく断れなくなった。

「あ　ありがと！」

木のスプーンで一口。

口の中にひんやりとした甘味がすう　　っと爽やかに広がった。  
顔が自然に緩んでいく。

「　おいしー　」

「ぷっ　なんかガキみてー！」

（　夢中で棒アイスかじってるくせに、どっちがガキなんだか）

気が付かれないように、何気なく和也に視線を向けた。

綺麗な無駄の無い輪郭

くつきりした二重に



スツと通った鼻筋

ワックスでふんわり整えられた髪は  
黒に近いダークブラウン。

その前髪は斜めに緩く分けられていて  
たまに一束だけ顔にかかる。

よく焦げた健康的な肌と、細いわりにしっかりとした腕や肩。

声は少しだけ甘くて  
たまに切なくさせる。

…うん、金井ユミが夢中になるのも納得のいく、よくモテるタイプ  
だ。

話は、金井以外の女の子からも  
よく聞くことがあった。

「そうだ、先生！」

「なっ 何?!」

彼を見ていた所で急に本人が顔を上げたため、必然的に目がガツチリと合い、内心ドキリとする。

「明日さ、スポーツ大会なんだけど！」

「ええ、そうね。」

スポーツ大会。

この都会のド真ん中の高校で  
体育以外に唯一ある、スポーツの祭典。

各競技に分かれてクラス単位で得点を競う行事らしい。

「俺さ、リレーに出るんだ。  
アンカーで。」

「アンカー？すごいじゃない！」

「いや、今回はけっこう足の速いメンツが揃ってるらしいから勝てるかわかんねー。」

でも…1位になったら」

和也が、何かを考えるように、目線をあたしからズラした。

「？ なかったら？」

それを問い掛けると、何かを決めたように目線をあたしに戻し、ハッキリとした口調でこう言った。

「1位になったらデートしてよ。俺と。」

ベタな表現かもしれないけど

あたしは本気で自分の耳を疑ってしまった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4149c/>

---

放課後は保健室で。

2010年10月20日23時47分発行